

## 春陽会会務報告 (第十七回 昭和十四年) (38)

倉田白羊氏を失つたことは会の一大事だった。昭和十三年十一月二十九日逝去、行年五十八歳、計らずも今年の春陽会は故人の遺作室を設ける不幸に際会した。

会は本年を迎へるに当たつて、全員協賛を以て、従来会友だった伊藤慶之助、加山四郎、川端彌之助、森田勝の四君を会員に推挙したので、倉田さんを失つた現在、会員二十一名の陣容となつてゐる。

小林徳三郎はその後大分健康恢復したが、帰朝後引続き病氣静養を要した森田勝が未だ完全には本復に至らないのは残念に思つてゐる。森田の容態は仕事仕事を始めるとからだに触る程度で、静養中の森田自身の元氣は日常の進退は無いのだから、無理せずにもう暫く静養して貰ふことである。

出征中の原精一はまだ帰還しない。戦地でも作品展を催した様子だが、会へもそれ等の作品が届くことだらう。佐野八郎等、会の常連で出征した者は目出度く凱旋して来た。

鳥海青児が漢口戦の頃に従軍した。上野春香は遙かに印度ダーヂリン迄行つて近頃帰つて来たが、会の者で外遊者は近頃この邊りのところで、今は西洋へ行つてゐるものは無い。巴里に長谷川潔が居るだけである。常連出品者の中には外遊したものが二、三有る様子だから今年はその特別出品ものが少し懸かることだらう。

会務委員に今関啓司が加はつた。現在七名。足立源一郎、中川一政、木村莊八、石井鶴三、鳥海青児、水谷清、今関啓司。

今年はいつもの型の雑誌を作らず目録を作らない代りに本誌をそれに換へて、上野が編輯に当る都合だ。大阪朝日新聞社からの作品グラフは表紙を伊藤慶之助が執筆した。ポスターは今年に加山四郎である。

会が予ねて政府主催展を総合展ならしめたく考へてゐることは、そのために実行試案なども當路に示して、年来立場を明らかにして来たところだが、當路がそのコースに対して民間各団体へ適當の顧慮を払はない場合は、会は政府展と無関係であるが、顧慮を用ゆる場合には会は協賛の立場の執れるものである。昨年度はそれで会から中川一政、木村莊八の二名を政府展委員に送つた。従つて会関係のものから官展へ出品する者を生じ、一〇名程の入選者もあつた。

会それ自体の態度としては、なにぶん先方の交渉や決定が時日の乏しい急場に起つたので、用意の時間に事欠いた為、全会を挙げての官展出品と云つた程の積極的には動きにくかつた。

向後についても常に官展に対しては、我々主張する如く、日本の官設展のコースは総合的に考慮する他は無いと思つてゐる。総合コースに向ふ限りやがては、その成果を漸進せしめる一石と成る立場に於て、我々は協賛の用意を惜しまないけれども、何の意味からも官展の委員スタッフが限定されることは好まない。

その意味では春陽会は「官展側」ではない。

昭和十四年十一月二十九日

春陽会